

第6章 考察

山陰地方中部域における縄文時代中期後葉～後期初頭土器の変遷

—北浦松ノ木遺跡出土縄文土器の意義—

柳浦 俊一（島根県教育庁埋蔵文化財調査センター）

はじめに

北浦松ノ木遺跡では、縄文時代中期後葉から後期初頭にかけての土器が出土した。一瞥したところ、中期後葉から中期末古段階にかけてと、やや時間を置いて後期最初頭のまとまりが認められる。既存の型式では、中期が里木Ⅱ・Ⅲ式（間壁 1971・矢野 1993）、北白川 C 式（泉 1985）または矢部奥田式（矢野 1994）、後期が中津式（鎌木・高橋 1975）または九日田式（柳浦 2003）である。

山陰地方中部域では、中期後葉から中期末のまとまった資料がなく、実態がつかみにくい時期である。北浦松ノ木遺跡はまさにこの時期に相当し、当地の様相に曙光を与えたものとなった。本稿では、これらの土器についての位置付けを考えたい。山陰地方中部域の該期土器を概観しておく。

後期初頭・九日田式は、比較的出土例が多い。しかしながら、その成立過程は明らかにされておらず、その後の展開も明確に説明されたとは言い難い。本稿後段では、九日田式の成立と展開について再考してみたい。

1. 山陰地方中部域の中期後葉～中期末の土器編年（第 26 ～ 30 図）

撚糸文土器の時期：北浦松ノ木遺跡では、里木Ⅱ・Ⅲ式新段階から中期末古段階に相当するものがあり（第 26 図 -1 ～ 9）、この間が遺跡の主体的な時期と考えられるが、最も特徴的なのは撚糸文土器である。撚糸文土器はかつて里木Ⅱ式の指標とされた（間壁 1971）が、間壁が分類基準とした撚糸文と条痕文（間壁の里木Ⅲ式）はかなりの部分が時間的に重複するとされた（泉 1988a・矢野 1993）。矢野は文様の変化を重視し、里木Ⅱ式と同Ⅲ式をまとめて「里木Ⅱ・Ⅲ式古段階・中段階・新段階」と呼んでいる（矢野 1993、第 26 図 -10 ～ 13）。ただし、撚糸文については、泉、矢野ともに里木Ⅱ・Ⅲ式中段階に収まると考えているようである。

北浦松ノ木遺跡では撚糸文土器が多数出土しているが、里木Ⅱ・Ⅲ式古段階に遡るものは 1 点のみ（第 16 図 -1）である。地文以外の文様をみると、これ以外の土器が里木Ⅱ・Ⅲ式古・中段階主体とは考えにくく、地文としての撚糸文が里木Ⅱ・Ⅲ式中段階以降に残存している可能性が考えられる。

第 26 図 -2 ～ 7 は撚糸文が施された土器である。3 は横走沈線文と刺突文を交互に 3 段配した土器で、これは同・新段階の特徴といえる。7 は直線文を挟んで 2 段の波状文が描かれている。同様な波状文は、第 26 図 -12・13 など地文を持たない土器や、第 29 図 -8 のように地文が縄文に転化した土器に例があり、幡中光輔は「里木Ⅱ・Ⅲ式系統土器群」と呼んで中期末古段階（北白川 C 式古段階併行）に位置付けている（幡中 2012）。大ぶりの波状文は、里木Ⅱ・Ⅲ式古・中段階の連弧文（第 26 図 -10）に祖形が求められ、同・新段階で波状文に転化するという（矢野 1993、第 26 図 -11 ～ 13）。

山陰地方中部域で波状文が主体的な文様をなすのは、中期末古段階と思われる（幡中 2012）。

第 26 図 -5 は押引文、4 は刺突文が横走、6 は刺突文で連弧状の意匠を描いている。押引文は、里木貝塚で里木Ⅲ式とされた土器（間壁 1971）や北白川 C 式（泉 1985）にあり、里木Ⅱ・Ⅲ式中段階にはみられないようである。3～6 は撚糸文を地文とするものの、やはり同・新段階以降とするのが妥当であろう。

なお、この他に地文が撚糸文でありながら里木Ⅱ・Ⅲ式新段階以降の文様を持つものは、貝谷遺跡（第 28 図 -12）に類例がある（島根県教委 2002）。対向する波状意匠の間に渦巻き文を埋め込む文様は、中期末の文様意匠である。

里木Ⅱ・Ⅲ式の特徴の一つとして、折り返し口縁がある（第 26 図 -1）。北浦松ノ木遺跡では、複数の折り返し口縁土器が出土しているが、一例（第 26 図 -2）を除いては地文がない。2 は内外面に撚糸文が施されるが、折り返し口縁の形状は平板で、形骸化が著しい形状である。

器形の面では、3・6・7 がキャリパー形口縁の形状を維持しているが、里木Ⅱ・Ⅲ式古・中段階（10）に比べて矮小化している印象はぬぐえない。3・6 などの口縁形態は同・新段階の形状、7 は中期末古段階に近い形状と思われる。

5 は直口の器形である。口頸部の屈曲が弱い直口器形は、従来の里木Ⅱ・Ⅲ式の編年表では新段階以降に登場する器形である（泉 1988a の第 6 様式など）。これまでの研究を参考にすると、直口器形が当地で他の地域に先んじて出現するというより、撚糸文が他の地域より後まで残存すると考えた方が矛盾が少ないように思われる。

以上のように、北浦松ノ木遺跡では撚糸文土器が多数出土しているものの、文様や器形などからは里木Ⅱ・Ⅲ式中段階以前に遡らせることは難しいと思われる。このことは、山陰中部域で撚糸文が里木Ⅱ・Ⅲ式新段階以後まで残存する可能性を示唆している。当地では、間壁 1971 で里木Ⅲ式とされた条痕文土器はきわめて少なく、里木Ⅱ・Ⅲ式から中期末に至る地文の変遷は、瀬戸内地方とは違った過程をたどったと考えたい。

北浦松ノ木遺跡の縄文土器をみる限りでは、当地での中期後葉から中期末の地文変遷過程は以下の 2 案が想定される。

- ① （A）撚糸文 → （B）撚糸文＋地文なし → （C）地文なし＋縄文
- ② （a）撚糸文 → （b）撚糸文＋地文なし＋縄文

両案とも、撚糸文が主体とする時期（＝里木Ⅱ・Ⅲ式古・中段階）を先行させるが、①・②案の違いは、その後に撚糸文と縄文が同時に存在するかどうかの違いである。この点についてはさらに良好な資料が求められるが、北浦松ノ木遺跡での出土状況をみると、②案を支持したくなる。その場合、②案（b）は里木Ⅱ・Ⅲ式新段階となり、縄文の登場が遡ることになる。また、北白川 C 式が中期末に置かれるので、②案では従来の編年観と矛盾が生じることになる。兵庫県熊野部遺跡のように、当地でも里木Ⅱ・Ⅲ式新段階に縄文が波及している可能性も考えられる。一方、型式学的には①案でこの矛盾が解消されているが、これを支持するような資料は今のところない。

以上をまとめると、北浦松ノ木遺跡の撚糸文土器は、里木Ⅱ・Ⅲ式新段階以降まで残存する可能性

が考えられる。しかし、7の波状文が、中期末古段階とした第29図-8とよく似た文様とはいえ、撚糸文を中期末段階まで下げることは躊躇する。とりえず、撚糸文の当地での下限は里木Ⅱ・Ⅲ式新段階としておく。



第26図 北浦松ノ木遺跡の撚糸文土器他（1～9）と里木Ⅱ・Ⅲ式中段階（10）・新段階（11～13）

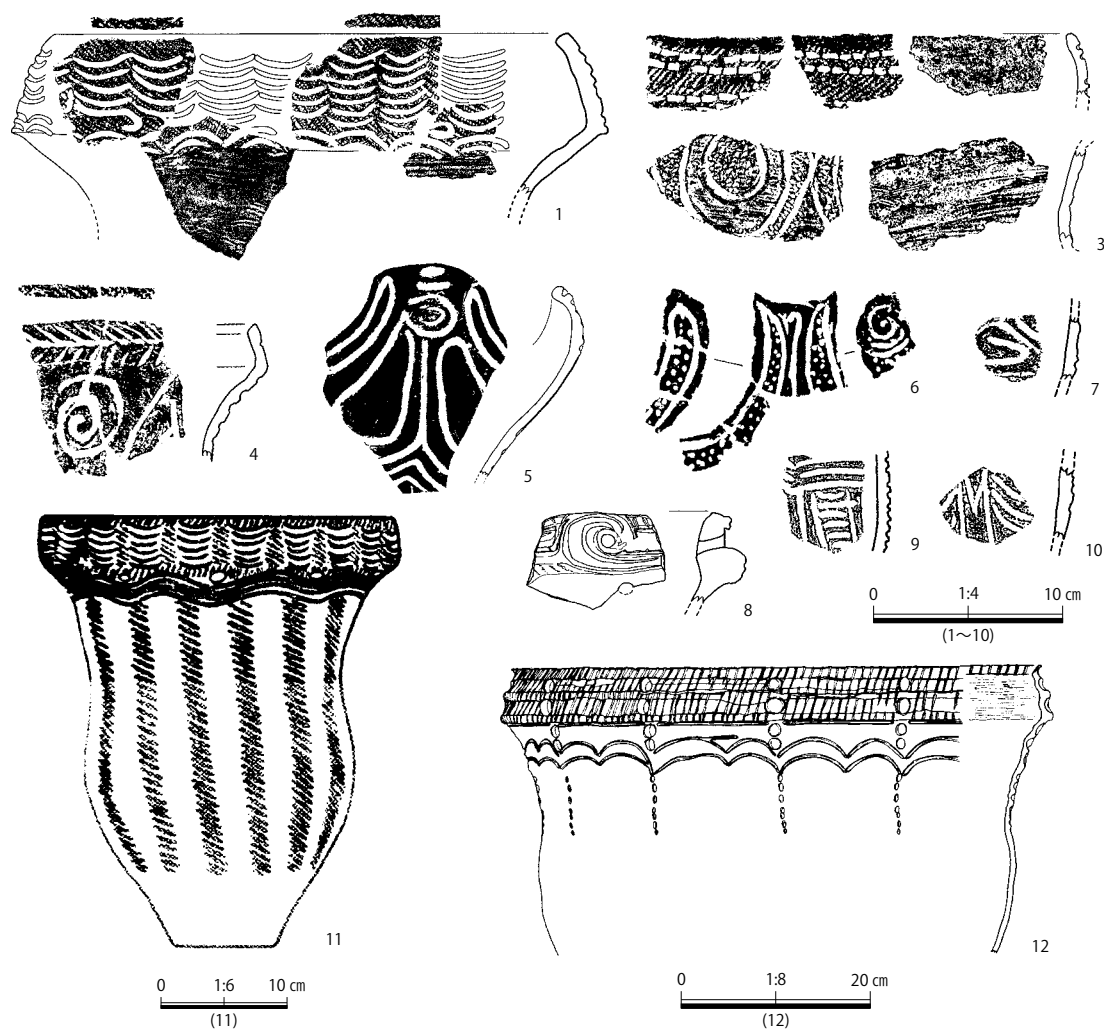
北白川C式の流入：第27図-1～3は、近畿地方に分布する中期末・北白川C式によく似た土器である。3は中期末新段階まで下る可能性も否定できないが、他は中期末古段階と捉えることができよう。

第27図-1は、近畿地方中期末の北白川C式A4類（泉1985）のうち、かつて星田式と呼ばれたもの（第27図-11）に文様・器形ともによく似ている。波長の短い重連弧文などは星田式の影響が強いと思われるが、頸胴部に垂下する帯縄文が施されていないことから、在地化した土器と考えられる。

2は押し引き状沈線文によって長方形区画文を描く土器、3は横位に連結した円形意匠の土器で、これも北白川C式によく似ている。3は内外面に二枚貝条痕がみられること、文様が頸部にまで拡大している点などは、在地化といえるかもしれない。

北白川C式は、桂見遺跡（鳥取市教委 1978）、栗谷遺跡（福部村教委 1990）など鳥取県東部でまとまって出土しているが、鳥取県西部以西では主体的に出土することはない。中期末の山陰地方中部域は、北白川C式の分布圏から外れており、この時期には第29図-7～9のような在地の土器が主体となっていたと考えられる（幡中 2012）。

当地の北白川C式（第27図-4～10・12）は散発的な出土である。これらに著しく変容したものはなく、祖形の特徴を維持している。一方、山陰地方中部域の中期末土器は在地的に展開しており、北白川C式の影響が大きいとはいえない。北白川C式は波状的、貫入的に波及したようである。山陰地方中部域の中期末土器は、在地土器に北白川C式が少数混じるという状況が考えられる。



第27図 北浦松ノ木遺跡（1～3）と山陰地方中部域の北白川C式（4～10・12、11は星田式模式図）

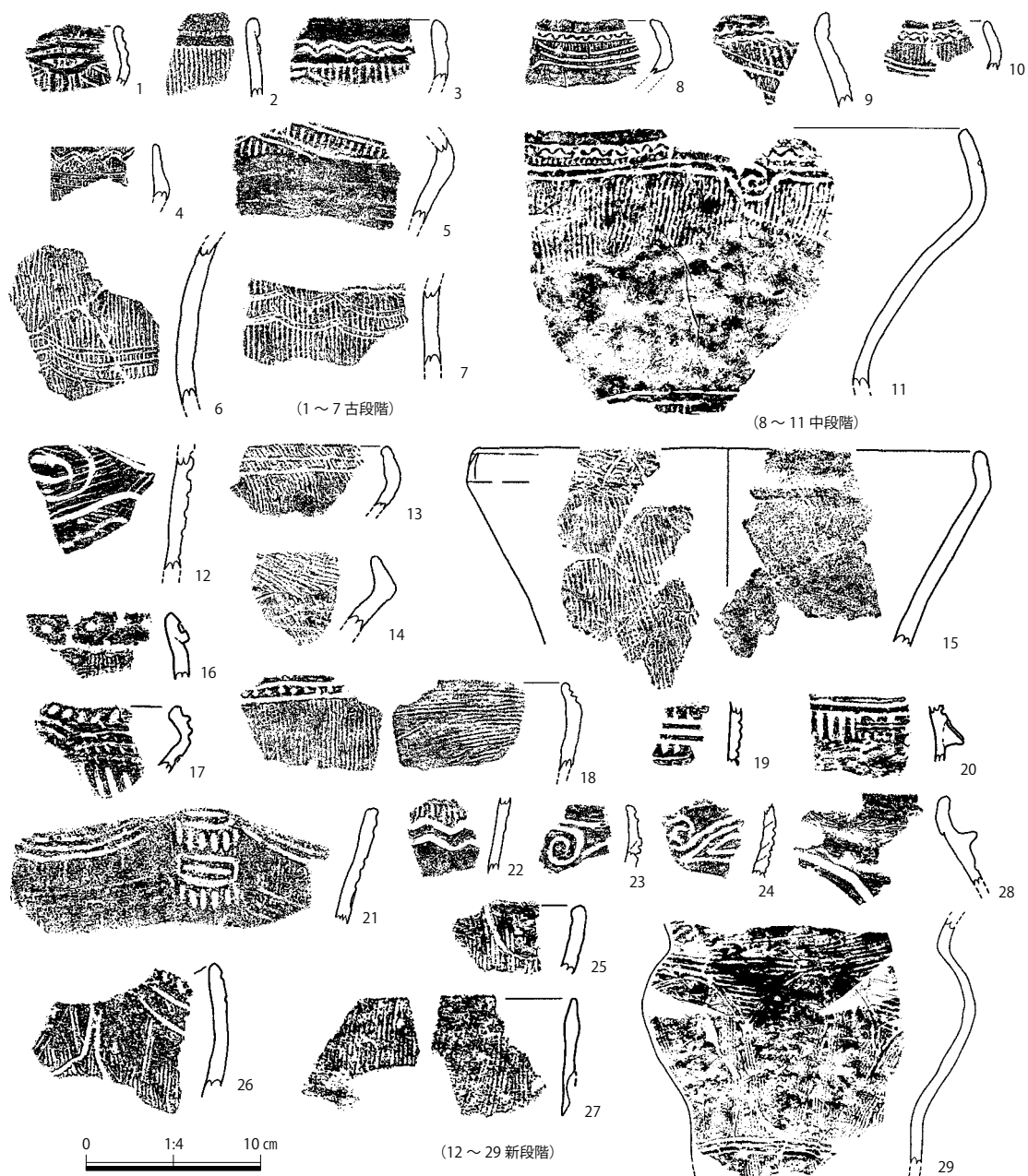
2. 中期後葉～中期末の編年案（第28・29・30図）

以上を踏まえ、山陰地方中部域の中期後葉から中期末の土器編年を示しておく。現状ではまとまった資料に恵まれていないので、矢野 1993・1994、富井 2005、幡中 2012などを参考にまとめた。

里木Ⅱ・Ⅲ式古段階（第28図-1～7）：キャリパー形口縁の器形で、地文撚糸文に半截竹管工具による小波状文（3・4）、連弧文（5～7）をこの段階の指標とした。地文以外の文様は、口縁部と頸部に

集中する。地文の撚糸文は、頸部以下まで整然と縦走するもの（6・7）や、口縁部のみ施文し頸部を無文とするもの（5）がある。1・2には撚糸文施文後に細隆線文が貼り付けられ、1には細隆線文に連弧文が取り付いている。

里木Ⅱ・Ⅲ式中段階（第28図-8～11）：キャリパー形口縁を維持し、半截竹管による小波状文が交互刺突文に変化し、連弧文施文具が半截竹管状工具からへら状工具に変わったものをこの段階の指標とした。地文は撚糸文が多いが、条痕文のもの（10）が少数混じるようである。交互刺突文の下位は、8～10には連弧文、11には横走沈線文が施される。8の左端、11の右端近くには、連弧文、横走沈線文から連続して渦巻き文が描かれている。



第28図 山陰地方中部域の里木Ⅱ・Ⅲ式

里木Ⅱ・Ⅲ式新段階（第28図-12～29）：矢野1993では、里木Ⅱ・Ⅲ式新段階の特徴を、交互刺突文（8～11）が刺突文と沈線文に分離し、沈線文間に刺突文が施される（18）ことや、沈線上に刺突文が施される（19・20）ことを指標としている。沈線文はヘラで描かれ、文様は大ぶりになる。地文は、条痕文あるいは無地文とする研究者が多い。

16～22は、矢野1993で里木Ⅱ・Ⅲ式新段階とされたものに近い土器である。16・18・21は地文に条痕文、17は頸部に条痕文の代替と思われる縦位の沈線文がみられる。22は波状文の上方に条痕文が施され、装飾的效果を上げている。

12～15は地文に撚糸文を持つ土器である。12は2本単位の対向波状文間に、渦巻きまたは楕円意匠を埋め込んでいる。13は2条の横走沈線文、15は鋸歯状文が口縁部に描かれている。13～15は口縁部が「く」字形に屈曲する器形で、15は浅鉢の可能性もあるが、全形が復元できるほど大きな破片ではない。

23・24は、幡中2012で中期末古段階とされた土器である。ここに描かれた渦巻き文は、里木Ⅱ・Ⅲ式古段階以来の渦巻き文の形状を留めていることから、この段階と考えた。

25～27は垂下する条痕文を地文とする土器である。間壁1971で里木Ⅲ式とされた地文条痕文土器は、当地では極めて少なく、25～27のような土器がこれに相当するかもしれない。25・26は大ぶりの連弧文が描かれている。器形はいずれも直口器形に近く、時期が下る可能性もある。

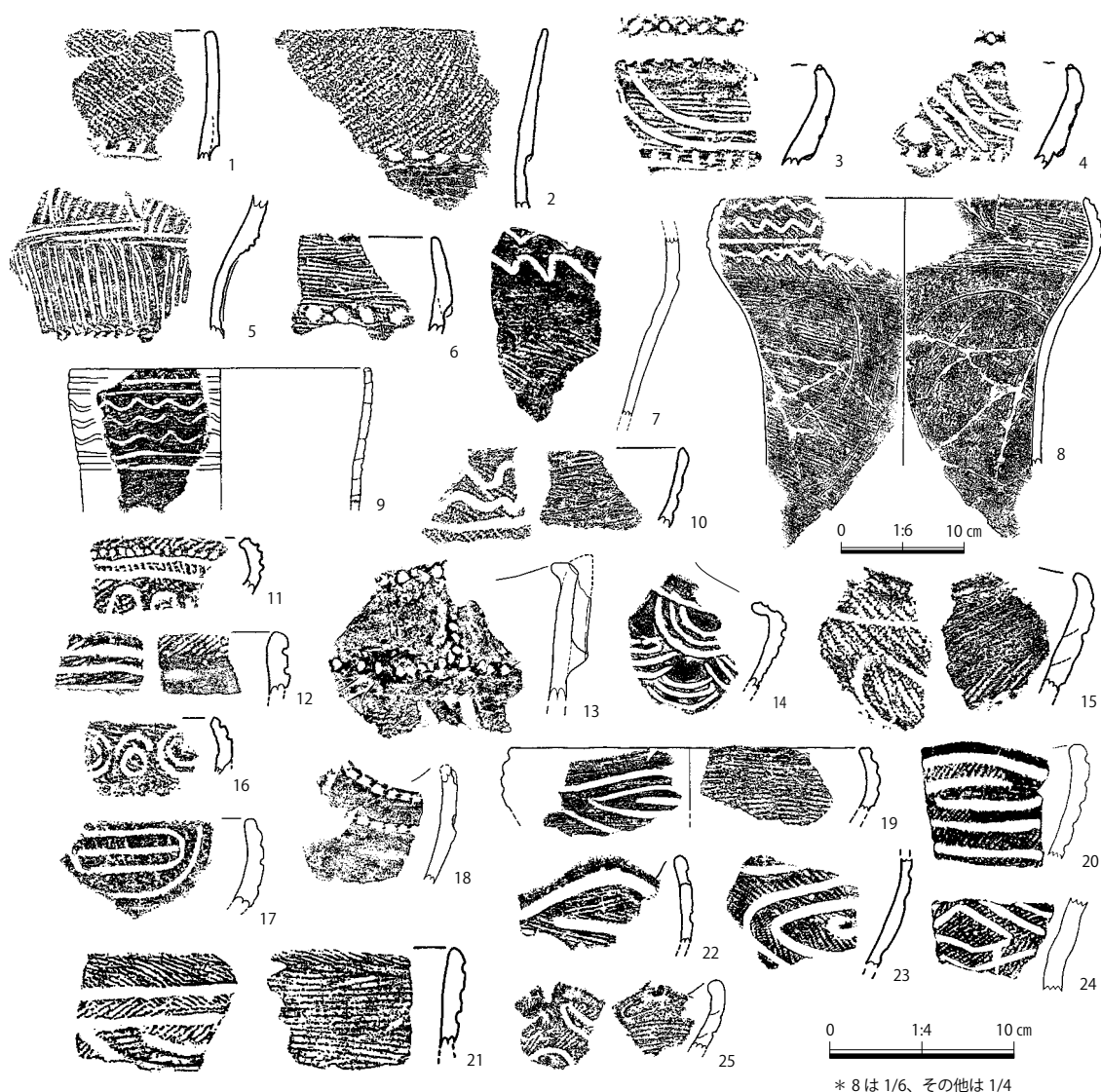
28・29は口縁部が直立して胴部が球形に張る器形で、図だけで比較すると、東海地方の咲畑・醍醐式に近い器形（例えば泉1988bの807）のようにみえる。ただし、文様は当地の文様で、器形のみ模倣されたと思われる。28に大ぶりの円形文あるいは下弦の連弧文、29に大ぶりの下弦の連弧文と撚糸文が施されている。29は半截竹管工具による連弧文が描かれるが、文様が大ぶりなこと、撚糸文が限定的であることから、この段階と考えた。28はヘラ状工具による施文である。

中期末古段階（第29図）：矢部奥田式に類似（1～4・6）または変容したもの（5・13）、波状文（7～10）や横走沈線文（12）が描かれるもの、区画文など単位文様が描かれるもの（14～25）のうち、磨消縄文化が進んでいないものを抽出した。縄文が施されるものが散見される（1・2・5・8・10～12・15・17・20・21・23～25）が、縄文は口縁部全面に施され、沈線文と一体化していない。

14・17は里木Ⅱ・Ⅲ式の連弧文の末裔と考えられ、21は17がさらに変容したものであろう。19・20は波状文から派生したと考えられ、23・24は19の変容と思われる。15・21・23～25は九日田式に近い文様を持つので、時期が下る可能性もある。

中期末新段階（第30図）：磨消縄文化が進んだものを中心に集めた。区画内または沈線間に縄文を納める方向が認められるもの（3～10）の、描線が完全に一筆書きでないもの（4・9・10）、交錯するもの（17）などがあり、磨消縄文は完成されていない。1・2は口頸部や胴部に広く縄文が施され、地文は古段階の様相であるが、文様が円形またはJ字意匠を描いていることからこの段階と考えた。5・6は三日月状区画文が2段に配される土器で、里木Ⅱ・Ⅲ式の連弧文から派生したと思われる。4・9は区画内を埋めるような沈線文があり、10は渦巻き文の末端が途切れたまま終息している。

1・9・14～16は頸部が強く屈曲する器形で、九日田式の祖形となる器形である。14・15は波状文

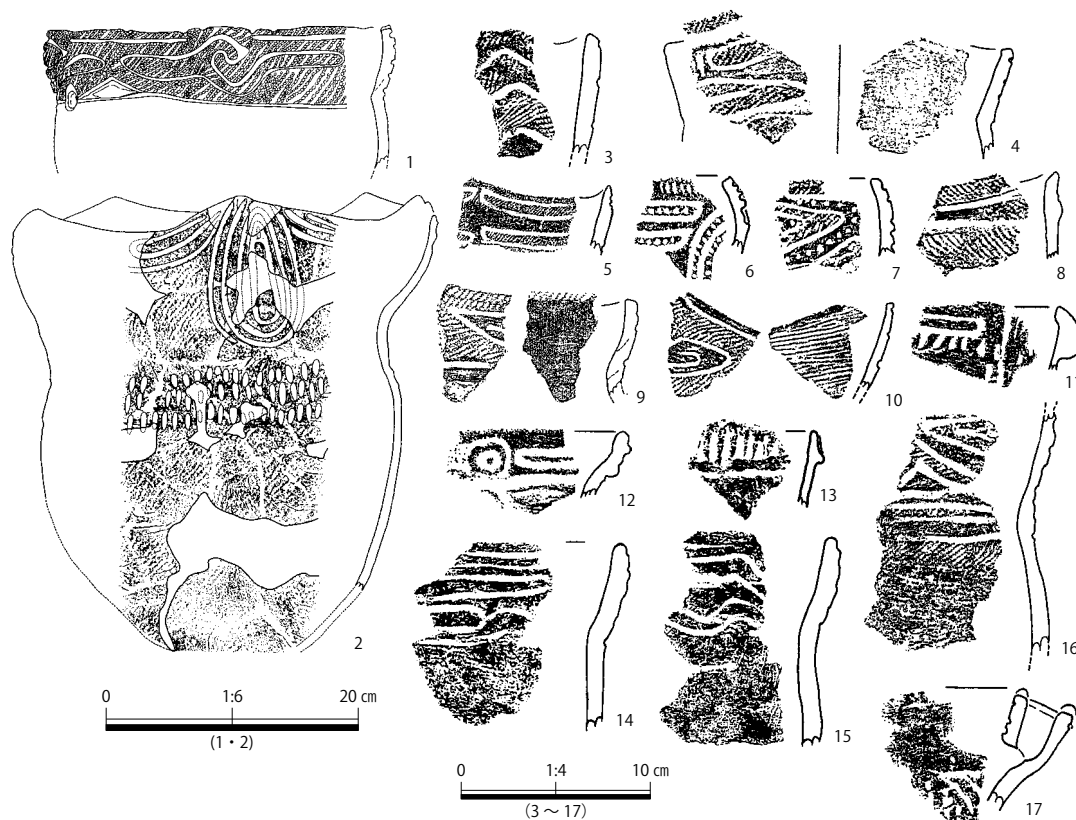


第29図 山陰地方中部域の中期末古段階

に似た文様が古相が窺えるが、三井Ⅱ遺跡で17などとともに出土していることから、この段階と考えた。

11～13は口縁部が肥厚する土器である。11・12は頸部以下に文様が展開するようである。同様な土器は、岡山県長縄手遺跡竪穴住居2・同3で、中期末新段階の土器とともに出土している（岡山県教委2005）。

山陰地方中部域の中期後葉から末にかけての土器編年は、おおむね以上のような推移をしたと考えられる。この時期の土器は断片的なものが多く、当地の主体的に存在した土器群が明確にしないが、船元式から里木Ⅱ・Ⅲ式中段階までは概略瀬戸内地方と同じ動向、これ以後は里木Ⅱ・Ⅲ式を母体とした在地的な土器群が主に分布していたように思われる。その中に、北白川C式や矢部奥田式が客体的に混じる状況が、当地のあり方ではなかろうか。



第30図 山陰地方中部域の中期末新段階

3. 九日田式の成立過程と展開（第31図）

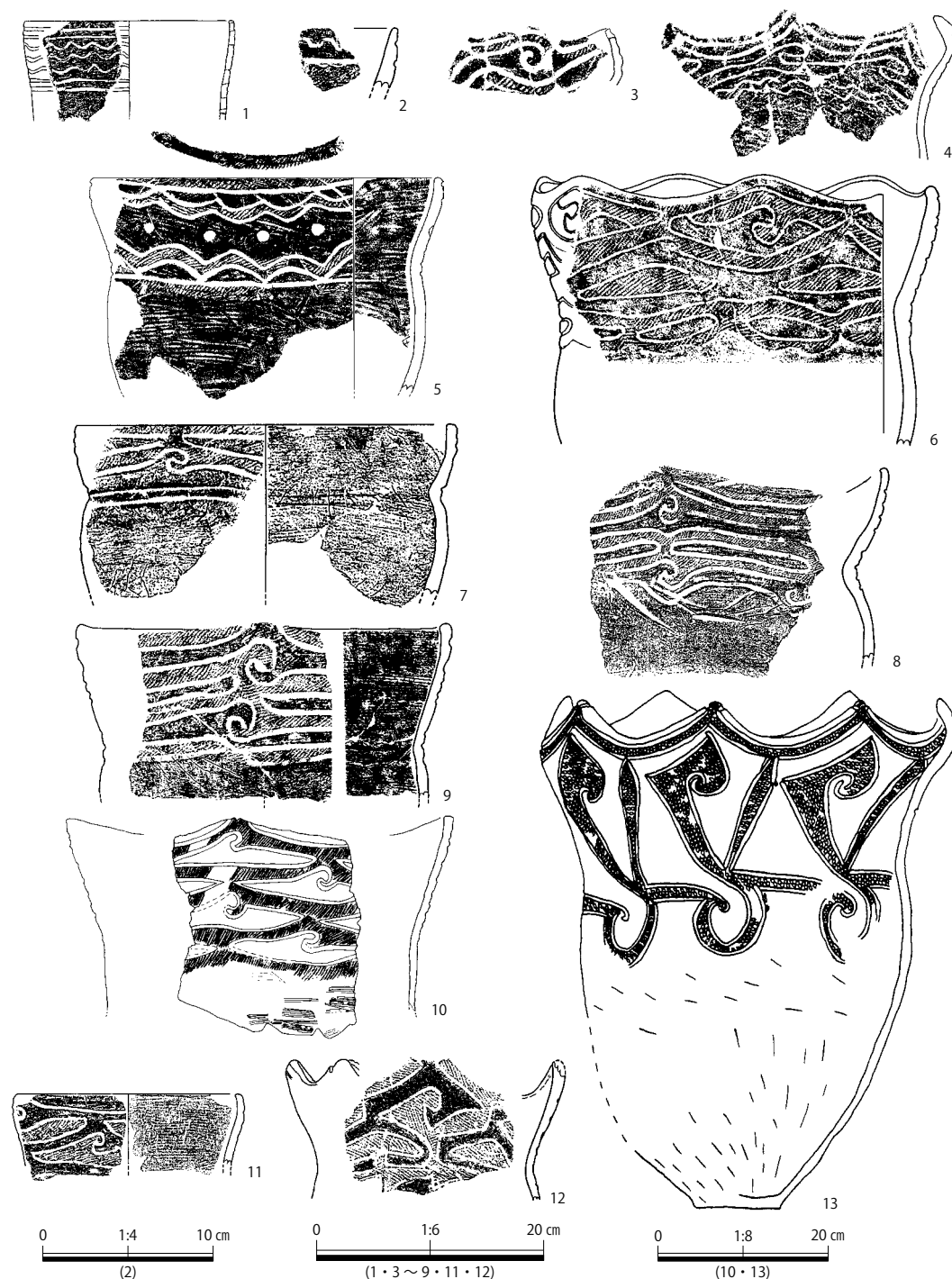
九日田式は、山陰地方中部域における後期初頭・中津式の地方型式で、横位展開するJ字文様と強くくびれる器形が特徴である（柳浦 2003）。北浦松ノ木遺跡では、九日田式的良好な個体が出土した（第31図-5）。この土器は、九日田式の成立を考えるうえで重要である。

第31図-5は、横走る縄文帯に挟まれて対向する波状意匠が描かれ、その中間に凹点文が配されている。6は口縁部に菱形の区画文が、頸部に紡錘形の区画文が連なっている。両者とも対向する波状意匠の磨消縄文帯が上下に繋がった意匠と考えられる。

第31図-5は最下部の縄文帯が磨消縄文になっていないこと、6は菱形区画文に取り付いた小J字文が区画文と一体化していないことから、この2つは九日田式成立期に位置付けられる（幡中 2012）。波状意匠や菱形の区画文は、中期末の波状文から発生した意匠と想定することができる。第31図-1を磨消縄文化すれば5となり、波状口縁の形成に連動して磨消縄文化すれば6のような菱形区画文となろう。九日田式の文様意匠は、中期末の波状文を母体として誕生したと考えられる。なお、波状文は始源を里木Ⅱ・Ⅲ式の連弧文に求められ、中期末を通じて一般的な文様である（2）。

第31図-6にみえる小J字文も、中期末には成立していたようである（第30図-1）。岡山県長縄手遺跡（岡山県教委 2005）ではこの祖形となりうる文様があり（3）、これが中期末新段階に小型J字文に変化する（4）と考えられる。これが山陰地方中部域に導入され（6）、九日田式古段階の主要文様となる（7）。

第31図-3と同様な文様は、山陰地方では少なく、瀬戸内地方によくみられる（岡山県教委 2005）。瀬戸内地方の後期初頭・中津式の文様構成は、縦位展開を基本とし、文様が横位展開をする中期末とは基本理念に断絶が認められる。それに対し、山陰地方中部域の中津式である九日田式は、横位展開に終始している。このことから考えると、中津式が成立する段階には、すでに地域性が確立していたと思われる。



1：中期末古段階 2～4：中期末新段階 5・6：九日田式成立期 7～9：九日田式古段階 10～12：九日田式新段階 13：五明田式

第31図 山陰地方中部域の後期初頭土器の系譜と変遷図

後続の福田 K2 式に併行する山陰地方中部域の地方型式として、五明田式がある（第 31 図 -13）。これは、沈線文末端が途切れて絡むものの、2 本の沈線文による磨消縄文が維持されている。文様意匠は、鉤状 J 字文と渦巻き状 J 字文が主体となる。五明田式の鉤状 J 字文はどのように誕生するのだろうか。

第 31 図 -12 は、中津式の特徴である一筆書きの手法ながら、意匠は五明田式にかなり近い。11 も J 字文の形状は端部が尖っており、五明田式の J 字文に似る。このような J 字文は、8 の口縁部意匠や、10 の縄文帯が反転することによって発生した文様意匠で、いわゆるネガ・ポジ現象がここでも起こった可能性が考えられる。特に、10 と 11 の縄文帯反転は直截的である。12 の意匠も同様な経緯で出現したと思われ、これが五明田式の鉤状 J 地文の基礎となったと考えられる⁽³⁾。

以上をまとめると、九日田式の成立に関わる文様変遷は、里木Ⅱ・Ⅲ式の連弧文から変容した中期末古段階の波状文を母体とし、中期末新段階に導入された小 J 字文が組み込まれて九日田式が成立したと考えられる。さらに、九日田式新段階で、文様のネガ・ポジ反転現象が起こって鉤状 J 字文が出現し、沈線文末端が絡む五明田式へ展開すると想定できるのである。この間、小 J 字文の導入など、他地域からの影響が認められるものの、在地的な様相が一貫して認められ、中津式、福田 K2 式段階で最も当地の地域性が顕著になったといえる。この時期がまさに、九日田式・五明田式に相当するのである。

結語

本稿では、北浦松ノ木遺跡出土の土器をもとに、中期後葉から後期初頭の変遷を概観した。撚糸文が里木Ⅱ・Ⅲ式新段階まで残存することを主張したが、今のところ議論する材料が北浦松ノ木遺跡に限られているので、今後の状況を注視する必要がある。

繰り返しになるが、当地の中期後葉から中期末の土器は散発的で、全形が窺える大きな破片も少ない。加えて、各遺跡の該期土器は多様であり、なかなか共通項を見い出せない状況にある。本稿で示した編年案も、将来良好な資料が蓄積すれば再編されるべきであろう。

後期初頭・九日田式については、資料的にはこれまでにかなりの蓄積があるが、型式学的な解釈は十分とは言えない。本稿では、中期末の在地的な土器が母体となって九日田式が成立し、さらに五明田式に展開する過程を示した。九日田式新段階に起こったネガ・ポジ反転現象は比較的理解しやすいと思われるが、同様に成立期から古段階にかけてもネガ・ポジ反転現象が起こった可能性があり、これについては未だに考えがまとまっていない。成立過程も含め、この整理が必要となろう。

【註】

- (3) 千葉豊・曾根茂は、中津Ⅱ式から福田 K2 式古段階（五明田式）への変化を文様自体の変遷としており、ネガ・ポジ反転現象とはみていない。当地では、中津Ⅱ式に相当する土器が未だ少ないため、この間の変化についてはもう少し状況を見る必要がある。

【参考文献】

- 泉 拓良 1985 「北白川追分町出土遺跡の縄文土器 中期末縄文土器の分析」『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅲ－北白川追分町縄文遺跡の調査－』京都大学埋蔵文化財研究センター
- 1988a 「船元・里木式土器様式」『縄文土器大観 3 中期Ⅱ』小学館
- 1988b 「咲畑・醍醐式土器様式」『縄文土器大観 3 中期Ⅱ』小学館
- 鎌木義昌・高橋護 1975 「縄文文化の発展と地域性 瀬戸内」『日本の考古学Ⅱ 縄文時代』河出書房新社
- 富井 眞 2005 「遺構一括出土の縄文土器の位置づけ」『長縄手遺跡』岡山県教育委員会
- 2008 「北白川C式土器」『総覧 縄文土器』アムロプロモーション
- 幡中光輔 2012 「山陰地域の縄文時代中期末土器考－中期末から後期初頭への系譜的検討－」『島根考古学会誌第29集』島根考古学会
- 間壁忠彦・間壁葎子 1971 『里木貝塚 倉敷考古館研究集報第7号』倉敷考古館
- 柳浦俊一 2003 「山陰中部域における縄文時代後期土器の地域性－特に「中津式」の地域性について－」『立命館大学考古学論集Ⅲ』立命館大学考古学論集刊行会
- 矢野健一 1993 「縄文時代中期後葉の瀬戸内地方」『江口貝塚Ⅰ－縄文前中期編－』波方町教育委員会・愛媛大学考古学研究室
- 1994 「北白川C式併行期の瀬戸内地方の土器」『古代吉備第16集』古代吉備研究会

【挿図引用文献】

- 泉 拓良 1985 「北白川追分町出土遺跡の縄文土器 中期末縄文土器の分析」『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅲ－北白川追分町縄文遺跡の調査－』京都大学埋蔵文化財研究センター
- 宍道正年 1974 『島根県の縄文土器集成Ⅰ』
- 間壁忠彦・間壁葎子 1971 『里木貝塚 倉敷考古館研究集報第7号』倉敷考古館
- 柳浦俊一 2012 「松江市美保関町所在 小浜洞穴遺跡について」『古代文化研究 20』島根県古代文化センター
- 岡山県教育委員会 2005 『長縄手遺跡』
- 島根県・頓原町（現・飯南町）教育委員会 1992 『五明田遺跡発掘調査報告書』
- 島根県・木次町（現・雲南市）教育委員会 1997 『平田遺跡』
- 島根県・斐川町（現・出雲市）教育委員会 1998 『上ヶ谷遺跡発掘調査報告書』
- 2001 『杉沢Ⅲ・堀切Ⅰ・三井Ⅱ遺跡発掘調査報告書』
- 島根県・松江市教育委員会 2000 『夫手遺跡』
- 島根県・（公財）松江市スポーツ振興財団 2016 『北浦松ノ木遺跡発掘調査報告書』
- 島根県教育委員会 1983 「才の峠遺跡」『国道9号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ』
- 1995 『才ノ神遺跡 普請場遺跡 島田黒谷Ⅰ遺跡』
- 2000 『神原Ⅰ遺跡 神原Ⅱ遺跡』
- 2002 『貝谷遺跡』
- 2003 『家の後Ⅰ遺跡 垣ノ内遺跡』
- 2007a 『家ノ後Ⅱ遺跡 2 北原本郷遺跡 2』
- 2007b 『原田遺跡（3）－5～7区の調査－』
- 2010 『志谷Ⅲ遺跡 安神本遺跡』
- 千葉豊・曾根茂 2008 「形式論の可能性－福田K2式を素材にして」『縄文時代第19号』縄文時代文化研究会
- 鳥取県・鳥取市教育委員会 1978 『桂見遺跡発掘調査報告書』
- 鳥取県・福部村（現・鳥取市）教育委員会 1990 『栗谷遺跡発掘調査報告書Ⅲ』
- 鳥取県・米子市教育委員会 1984 『陰田』
- 1986 『目久美遺跡』
- （財）鳥取県教育文化財団 1984 『久古第3遺跡・貝田原遺跡・林ヶ原遺跡発掘調査報告書』

【挿図出典】○は遺跡名。図は、実際の観察に基づき、筆者の判断で傾きや拓本の向きを変えたものがある。

- 【第26図】 1～9（北浦松ノ木）…松江市教委・松江市スポーツ振興財団 2016
- 10・12・13（里木貝塚）…間壁他 1971 11（栗谷）…福部村教委 1990
- 【第27図】 1～3（北浦松ノ木）…松江市教委・松江市スポーツ振興財団 2016 4（小浜洞穴）…柳浦 2012
- 5（夫手）…松江市教委 2000 6（龍ノ駒）…宍道 1974 7・10（貝谷）…島根県教委 2002
- 8（垣ノ内）…島根県教委 2003 9（家ノ後Ⅱ）…島根県教委 2007a 11（星田式・模式図）…泉拓良 1985
- 12（林ヶ原）…鳥取県教育文化財団 1984
- 【第28図】 1・2・17（家ノ後Ⅱ）…島根県教委 2007a 3～10・13・14・18・22（垣ノ内）…島根県教委 2003
- 11・29（目久美）…米子市教委 1986 12・28（貝谷）…島根県教委 2002 15（志谷Ⅲ）…島根県教委 2010
- 16・19・20・25～27（原田）…島根県教委 2007b 21（陰田）…米子市教委 1984
- 【第29図】 1・2・5・6・8・10・11・16（家ノ後Ⅱ）…島根県教委 2007a 3・4・18（志谷Ⅲ）…島根県教委 2010
- 7（夫手）…松江市教委 2000 9（才の峠）…島根県教委 1983 14・19・21・22（貝谷）…島根県教委 2002
- 15・25（神原Ⅱ）…島根県教委 2000 17（垣ノ内）…島根県教委 2003 20・24（五明田）…頓原町教委 1992
- 23（原田）…島根県教委 2007b
- 【第30図】 1（神原Ⅱ）…島根県教委 2000 2（上ヶ谷）…斐川町教委 1998（幡中 2012 より転用）
- 3・10・16（貝谷）…島根県教委 2002 4（志谷Ⅲ）…島根県教委 2010
- 5～7・11・17（家ノ後Ⅱ）…島根県教委 2007a 8・12（島田黒谷Ⅰ）…島根県教委 1995
- 13（原田）…島根県教委 2007b 14・15（三井Ⅱ）…斐川町教委 2001
- 【第31図】 1（才の峠）…島根県教委 1983 2・7～9・11（貝谷）…島根県教委 2002
- 3・4（長縄手）…岡山県教委 2005 12（志谷Ⅲ）…島根県教委 2010 13（平田）…木次町教委 1997